継続する過去と未来：諸葛亮、ロマン・ロランそしてエーリッヒ・フロム

伊藤 顕知（山口大学大学研究推進機構・URA）

私は、大学研究推進機構で URA（ユニバーシティ・リサーチ・アドミニストレーター）という研究者のサポートをする仕事をしており、現在は専門の研究者ではない（過去は日立製作所の研究開発部門で磁気ディスクや半導体の研究をしていたが）。しかし、URA として時間学研究所のサポートの仕事をさせていただいている間に時間学の魅力に取りつかれ、最近は時間学関係の本を読んだり、関連分野に関して調査をしている。

今回、表題の「継続する過去と未来」というプロジェクトに参加する機会をいただいた。このプロジェクトでは、山口大の教職員が自由にエッセーを投稿することができるのだが、さて私は何を投稿しようかと思案したところ、表題の内容にたどりついた。

私の（研究の）専門は物理工学であるが、個人的に最も傾倒しているのは音楽と歴史である。実はこの二つの領域はいずれも時間学と関連が深いのである。特に歴史は、まさに「継続する過去と未来」を対象とする学問であり、このプロジェクトにぴったりの分野といえるのではないだろうか。

今回取り上げるのは、中国３千年の歴史で最も尊敬を集める政治家の一人である諸葛亮（１８１―２３４年）、２０世紀前半にフランスを活躍した文学者のロマン・ロラン（１８６６―１９４４年）、そして２０世紀ドイツの哲学者・心理学者であるエーリッヒ・フロム（１９００－１９８０年）の３人である。一見関係がないように見えるこの３名の偉人がどのようにつながるか、それがこのエッセーの主題である。

私がこの３名の偉人のうちで最初に出会ったのがロマン・ロランである。実はロマン・ロランとの出会いは、ロマン・ロランが記した有名な「ベートーヴェンの生涯」ではなく、音楽評論家・吉田秀和のベートーヴェンに関するエッセーを読んだ高校生時代にさかのぼる。吉田秀和は、ロマン・ロランのベートーヴェン研究のうち、「復活の歌」の翻訳をしている。吉田秀和は、ベートーヴェンのスケッチ帳を丹念に調査研究したロマン・ロランのベートーヴェンの作品研究に、さらに独自の論考を加え、当時の私にはきわめて斬新な研究結果をさし示してくれたのだ。つまり私は音楽を通してロマン・ロランと出会ったのだ。

さて、そうなると、吉田秀和が種本としたロマン・ロランの「復活の歌」がどうしても読みたくなった。後年、東京大学の大学生として下宿していた頃である。神田のとある古本屋で、ロマンロラン全集（全４３巻、みすず書房）が完全な形で売りに出されているのを見つけた。その第２４巻に、「復活の歌」（吉田秀和訳）が収録されていた。この全集が全部でいくらだったか全く記憶にないが、どうしてもこの全巻を手に入れたくなり、父に頼み込んで、何と全巻を買ってもらったのである。父にこのようなことを頼んだのはこのとき限りだ。以後、この全集は私の幾度もの引っ越しとともに、その居を転々としたが、今も全巻そろって健在だ。私が所有している全集は、このほかには新版の名曲解説辞典（音楽之友社）だけだ。ロマン・ロラン全集は全部で４３巻もあるので、購入後４０年たっているにもかかわらず、読んでいる巻はまだ一部分である。ベートーヴェンの作品研究、ジャン・クリストフ、ベートーヴェンの生涯ほかの偉人伝、ガンジーやダゴールとの書簡集が特に印象に残っている。したがって、現在でも、巨人であるロマン・ロランの全貌をつかみ取っているとは言えない。しかし、その著作の一部分でも、特に 20 代のころに読んだこれらの著作から、私の人生は大きな影響を受けていると思う。

「ベートーヴェンの生涯」が上梓されたのは、１９０３年（ロランが３７歳の時）である。この後、大作である「ジャン・クリストフ」の執筆と並行して、英雄伝シリーズである「ミケランジェロの生涯」(1906 年)、「トルストイの生涯」(1911 年) が上梓される。「ジャン・クリストフ」の完成後まもなく、欧州大陸は第 1 次世界大戦の惨禍に巻きこまれる。ロマン・ロランは戦争勃発当時スイスに滞在していた。「ジャン・クリストフ」で、「仏独伊三国の文化は欧州の翼である」（この理想が実現されるのはさらに第２次大戦の惨禍を経た２０世紀後半である）と記しているロマン・ロランは、仏独両国に対して「戦闘中止」を訴えることになるが、この行為が祖国フランスへの敵対行為であると徹底的な批判を浴び、帰国することができなくなり、その後もスイスにとどまることになった。第１次大戦中の、ヘルマン・ヘッセとの往復書簡「戦いを超えて」も、ロマン・ロラン全集の第１８巻に収められている。大戦中の 1916 年にロマン・ロランはノーベル文学賞を受賞した。第１次大戦は 1918 年に終わりを迎えるが、その後に戦勝国が敗戦国に押し付けたヴェルサイユ条約に対しては、ロマン・ロランは極めて批判的であり、再び欧州大陸が大戦に見舞われるという暗い予測を持っていたとのことである。

このようなロマン・ロランの文学者としての経歴を見ても、「ベートーヴェンの生涯」はやはり重要な作品であると思う。20 代のころ、私はこの小著を何度も何度も読んだ。　特に「ベートーヴェンの生涯」の序文に記された、「思想もしくは力によって勝った人々を私は英雄とは呼ばない。私が英雄と呼ぶのは心に拠って偉大であった人々だけである」という言明、これこそ生涯変わらぬ「ラディカル・ヒューマニスト」であったロマン・ロランが遺してくれた金言であり、私たち一市井の人間もでも、この姿勢で生きていけば、必ず道は開けるというメッセージであると考えている。

実はこのロマン・ロランの「英雄」の範疇に当てはまる政治家として最初に思い浮かぶ政治家が諸葛亮なのである。諸葛亮は、中国の三国時代・蜀漢の丞相である。小説「三国志演義」では天才軍師として描かれているが、実像は変幻自在な軍の指揮は苦手であったのではないかと私と推察している。何よりも、諸葛亮の事績で特筆すべきは、一国の宰相としての政治姿勢と手腕であり、それは陳寿が記した正史「三国志」「諸葛亮伝」の末尾の評に的確にまとめられている（以下はウィキペディア「諸葛亮」からの引用)。

「諸葛亮が丞相だった際、百姓を安撫し、規範を示し、官職を省き、制度に従い、誠意を表して、公正な道理を施した。忠義を尽くし、時代に貢献した者には仇敵でも必ず褒賞を与え、法を犯し事を疎かにした者は身内でも必ず罰し、罪に服して真情を明らかにした者は重罪でも必ず赦免し、不実で偽りのある言葉を弄する者は軽罪でも必ず処刑した。善行は僅かでも賞さないことはなく、悪行は僅かでも罰さないことはなかった。諸事に精通し、物事は大本から理を通し、名実の一致を確かめ、虚偽は歯牙にもかけなかった。領内の人々は皆、彼を畏れながらも愛した。刑罰や政治が厳峻でも怨む者がいなかったのは、心を用いることが公平で賞罰が明らかだったからである。政治を識る良才で、管仲・蕭何といった名宰相に匹敵するといえよう。しかし連年のように軍を発動し、成功させることができなかったのは、臨機応変の軍略は彼の得手ではなかったからであろうか」

この評の中で、最も注目すべきは「領内の人々は皆、彼を畏れながらも愛した」という一節であろう。私が浪人生時代に熱中して読んだ吉川英治の「三国志」の末尾に、「篇外余禄/諸葛菜」という余禄がついている。この「篇外余禄」に、『殷芸小説』巻 6 にのっている桓温（東晋時代の名将）に関する逸話からとられた話がのっている。東晋の名将・桓温が成都に入った時、諸葛亮のことを知っているという老翁に、諸葛亮はどのような人物だったかを尋ねた。その老翁は、「わたくしの覚えている諸葛丞相は、別段誰ともちがった所はございません。けれども今、あなた様のいらっしゃる左右に見える大将方のように、そんなにお偉くは見えませんでした。ただ、丞相がおなくなりになってから後は、何となく、

あんなお方はもうこの世にはいない気がするだけでございます」といったということである。この話が真実かどうかはわからないが、私も吉川英治のように、この話こそ、諸葛亮の本質をついているのでは、と思う。最近、中国ドラマ「司馬懿・軍師連盟」を見たのだが、主役である司馬懿が、五丈原で諸葛亮が陣没した後、元の蜀軍の陣営を見回ったとき、「諸葛亮こそまさに天下の奇才だ。息子たちよ、よくこの陣営を見ておけ」と息子の司馬師・司馬昭に言うシーンがあった。民衆によって讃えられ、雌雄を争ったライバルや敵国の皇帝にも激賞される人物でありながら、全く偉人のように見えなかった諸葛亮。複雑な調整や判断が必要な政治空間に人生を捧げ、明確で簡潔でわかりやすい規範に基づいて、科学的に、そして公正無私な姿勢で政治にあたった丞相。彼こそまさにロマン・ロランが名著「ベートーヴェンの生涯」の序文で述べていた英雄、すなわち「思想もしくは力によって勝った人々を私は英雄とは呼ばない。私が英雄と呼ぶのは心に拠って偉大であった人々だけである。」という意味の英雄であり、私が尊敬をささげる理由である。そういえばロマン・ロランの葬儀の際にも、カトリックの司祭とフランス共産党の代表がそろってかけつけたということだ。ロマン・ロランも、まったく異なった思想的立場の人々から尊敬を集めていたという証左である。「心によって偉大であった英雄」のみが、立場を超えた人々から敬愛されるのではないか、と私は思う。

そこで次に、このロマン・ロランの「思想もしくは力によって勝った人々を私は英雄とは呼ばない。私が英雄と呼ぶのは心に拠って偉大であった人々だけである」で言明されている「英雄」に、どのようにすればなれるのか、という問いに遭遇する　これを具体的なメソッドとして示してくれたのが、心理学者・哲学者のエーリッヒ・フロムの、「愛するということ」（”The art of loving”：1956 年）である。エーリッヒ・フロムは、1900 年、ユダヤ教正統派の両親の間に生まれたユダヤ系ドイツ人である。カール・ヤスパースのもとで学位を取得し、フランクフルト大学の精神分析研究所で講師となったが、ナチスの台頭とともに、スイス・ジュネーヴに移り、さらに 1934 年、アメリカに亡命した。このころ、多くのユダヤ系のドイツ人がアメリカに一斉に亡命した。フロムの師であるヤスパースもユダヤ系のドイツ人であり、ドイツに残ったものの、幽閉生活を強いられ、強制収容所に送られる直前に連合軍によって解放されたとのことだ。ロマン・ロラン自身も、第２次大戦中、フランスがドイツに支配されていた間は、ヴェズレーの自宅で幽閉生活を送った。第２次大戦当時は、一般の民衆だけでなく、「心によって英雄」であった多くの人々も、苦難の生活を送っていたのだ。エーリッヒ・フロムは、1949 年にメキシコシティに移した。アメリカ合衆国の大学での教鞭は引き続きとってはいたが、フロムは、『近代資本主義が個人の自由をもたらした一方で、孤独や不安を生み出し、人間を「商品化・疎外』していると批判していたので、その総本山であったアメリカに住むことは難しかったのではないか。1974 年にスイスに移住し、１９８０年にスイスで死去した。

この本について触れる前に、エーリッヒ・フロムの壮年期の重要著作である「自由からの逃走」（”Escape from Freedom”：１９４１年）についても触れておきたい。この著書は、当時世界中に吹き荒れていたファシズムの心理的な起源について考察した名著である。近代になると、中世時代の身分制秩序が解体され、人々は職業も住む場所も自分で選べるようになったものの、安住できる「居場所」を失ったため、「自分はちっぽけで孤独な存在である」という強い不安にさいなまれるようになり（これをフロムは「○○からの自由（消極的自由）」と呼んでいる）、アトム化した大衆が溢れるに至った。プロテスタンティズムも教会の権威と一次的絆を解体し、アトム化する大衆を作り出す素地を作ったという指摘は重い。人々は、この耐えがたい孤独と不安から逃れるために、『自由から逃走』してゆくのだ。①強いものにすがる権威主義（サディズムとマゾヒズムの共棲関係）、②みんなと同じように行動する同調主義、③自分を不安にさせるまわりの環境や自分と違う意見の人

を攻撃する破壊主義、がその症例であり、これらの相乗効果によって、全体主義的な閉塞した社会が形成されてゆく、というのがフロムの分析である。この分析は、８０年以上の時を経て、２１世紀の現在にもあてはまるのではないか。いや、コンピューターやAI、インターネットが発達した現在こそ、より先鋭化した形でアトム化する大衆が生み出されていると思うのである。まさに継続する過去と未来である。

以上のような現代社会にあって、自由になるために、「○○への自由」（積極的自由）を獲得するには、どのようにすればよいのか？　つまりこの訓練こそが、「心によって偉大である（市井の人間としての）英雄」となる鍵であると考えられる。そしてこれに対する具体的なメソッドが、「愛するということ」（”The art of loving”：1956年）である。繰り返しになるが、あくまでも（私のような）市井の普通の人間が日々実行することが可能な「訓練」メソッドが記載されているというところが、この著作の素晴らしいところである。

この著作は、４つの章からなる（以下は、すべて参考文献に掲げた、鈴木結晶(翻訳)、紀伊国屋書店の第１４冊による）。

・第１章　愛は技術か
・第２章　愛の理論
・第３章　愛と現代社会におけるその崩壊
・第４章　愛の訓練

第１章から第３章までの内容は、この小エッセーでは割愛せざるを得ない。素晴らしい内容なので、もしまだお読みになっておられない方は、文末の参考文献を紐解いていただきたい。

「第４章　愛の訓練」が「愛する技術」（これが心によって偉大であった英雄になる技術でもある）をどのようにして訓練してゆくかの方策が示される。愛する技術が、その習得に必要な４つの基本姿勢ごとに例示されているのが大変実践的である。そして、この訓練の中で、とかく現代人が失いがちな「時間」への真摯な取り組みの例が示されている。

◇規律（Discipline）：気分や衝動に流されず、規則正しく取り組む姿勢
・規則的な時間に起きる
・1日のうち一定の時間を瞑想や読書、音楽、内省のためにあてる
・くだらない会話（現代ならばSNSの過度なスクロール）などに時間を浪費しない
・規律を「目的」ではなく「ライフスタイル」にする。すなわち仕事中も、友人と会っているときも、余暇を過ごしているときも、「自分の人生のすべての瞬間を丁寧に、能動的に生きる」という一貫した態度を持つ。
◇集中（Concentration）：目の前の相手や現実に完全に注意を向ける姿勢。
・一人でじっと座り、呼吸に意識を向ける（内省の訓練）。リラックスした姿勢で、背筋を伸ばして椅子か床に座る。目を閉じて目の前にある「映像」や「雑念」を追いかけないよう今に集中する。自分の「呼吸」に意識を集中させる。息を吸い、吐き出すというプロセスをただ追いかける。自分の生命の中心を感じ取る。これを少なくとも毎日朝の20分間行うことを推奨。
・「今、この瞬間」に全身全霊を傾ける
・音楽を聴くときは、ただ音楽を聴く。本を読むときは、ただ本を読む。景色を見るときは、ただ景色を見る。その瞬間にしていることが、自分にとって「世界で一番重要なこと」であると意識して没頭すること。これにより、心は散漫な状態から解放され、一つの対象に深く集中できるようになる。
・相手の話を「全身で聴く」（対人関係における集中）
→フロムは、この「集中して聴くこと」ができる人は、それだけで相手にとって癒やしの存在になると解説していることを、私自身も肝に銘じなければならない。

◇忍耐（Patience）：すぐに結果や見返りを求めず、時間をかけて育てる。
・「もし即座の結果を期待するなら、決して技術（アート）を学ぶことはできない」。現代の工業化された社会システム（スピード重視）の時間に逆らい、自然や生命のペースを生活に取り戻すことが忍耐の訓練である。
・技術の習得プロセスそのものを愛する。
・他者の「変化や成長」を待つ（コントロールを手放す）。
　→これも自分自身に特にかけている部分と認識している。「待つ」ということがいかに重要か。実は東洋的における多くの修行もこれにつながっているように思う。
◇信念（Faith）：自分の愛する力や、他者の可能性、そして目に見えないプロセスを信じ抜くこと。
・フロムの言う「信念」とは、宗教的な盲信や、権威を無批判に受け入れることではなく、自分の経験や観察に基づき、「目に見えない可能性や本質を確信すること」を指す。
・多数派の意見や、世間の「常識」が自分と異なるとき、自分の深く考え抜いた結論や実感を信じる。
・他者の本質を信頼する。他者（パートナーや友人など）の、まだ開花していない善意や可能性をあらかじめ信じる訓練。「信じて裏切られたらどうしよう」という不安を抱えながらも、あえて相手を信頼して自分を開示する行動をとる。

　フロムは、これら４つの基本姿勢を連動して訓練することが重要だと言っている。私もその通りだと思う。この中に、時間とどのように向き合うか、という視点がたくさん含まれていることに注目されたい。つまり、目前の時間と真摯に向かい合う実践を積み重ねることで、私のような一市井の人間でも、「心によって偉大である英雄」になることができるのだ。日々これを実践してゆくことは容易ではないが、これらのメソッドを常に顕在意識にとどめ、日々の行動を修正してゆくことを、これからの残りの人生で心がけてゆきたいと思っている。

【参考文献】
・「ベートーヴェンの生涯」　ロマン・ロラン（著）、片山敏彦（翻訳）、岩波文庫
　ロマン・ロラン全集（みすず書房）第１４巻でも読むことができる。
・「三国志」「諸葛亮伝」　陳寿（著）、私が読んだものは絶版になっているが、筑摩書房の井波律子氏の翻訳で読むことができる。
・「三国志」　吉川英治著、講談社の旧版で「篇外余録」を読むことができる。
・「自由からの逃走（新版）」　エーリッヒ・フロム（著）、日高六郎（翻訳）、東京創元社
・「愛するということ」　エーリッヒ・フロム（著）、鈴木結晶（翻訳）、紀伊国屋書店

※本内容は、私の NOTE のブログの記事を改変したものです。もしご興味があるかたは、こちらの URL を訪問いただけると幸いです。
https://note.com/chopin_love_k